17　　食べ物の恨み　　　　　　　　　　　　　　　　　　文法 助詞③　接続助詞②

読解 主題の具体的内容をつかむ

（みかんの一種）をこよなく大事にしている僧がいた。その隣の家に住む老尼が、重病になり、僧の橘を所望したが、僧に断られた。

老尼これを聞きて、㋐安からず思ひ、「病にせめられ、今日明日にきはまりたる身なれば、①たとひ多く食すとも、二三にはすぐべからず。それほどのことを惜しみて願ひをかなへざるこそ、②情けなけれ」と恨みけり。日ごろは極楽に往生せんことを願ひけるが、今にいたりてたちまち悪念をＡおこしつつ、あの木をはみ枯らす虫となつて、損とらせ、憤りを散ずべしと思ひてそしりたりける。隣の僧はこのこと知らず、橘を愛しけるⓐが、橘の落ちけるⓑを不思議に思ひて、取りて見るⓒに、袋ごとに五六ばかりの虫ありけり。明年もまた虫わきて、橘も小さくⓓて落ちけれⓔば、何にかはせんとて、③切りて捨てたり。

かの尼の願力とＢ言ひながら、多くの虫となりけるこそ不思議なれ。僧徒の身として、橘一つを惜しみつつ、わづかの願ひをＣへずして、④自他の罪業となしけるこそ、㋑あさましけれ。

* 語注

悪念＝悪事をたくらむ心。

五六分＝一分は三ミリメートル。

【原文】

老尼これを聞きて、安からず思ひ、「病にせめられ、今日明日にきはまりたる身なれば、たとひ多く食すとも、二三にはすぐべからず。それほどのことを惜しみて願ひをかなへざるこそ、情けなけれ」と恨みけり。日ごろは極楽に往生せんことを願ひけるが、今にいたりてたちまち悪念をおこしつつ、あの木をはみ枯らす虫となつて、損とらせ、憤りを散ずべしと思ひてそしりたりける。隣の僧はこのこと知らず、橘を愛しけるが、橘の落ちけるを不思議に思ひて、取りて見るに、袋ごとに五六分ばかりの虫ありけり。明年もまた虫わきて、橘も小さくて落ちければ、何にかはせんとて、切りて捨てたり。

かの尼の願力と言ひながら、多くの虫となりけるこそ不思議なれ。僧徒の身として、橘一つを惜しみつつ、わづかの願ひを叶へずして、自他の罪業となしけるこそ、あさましけれ。

問一　次の「内容わしづかみ」の空欄に本文中の語句を書き入れよ。

病の〔　　　　〕が〔　　　〕の実を所望したが、〔　　　〕は断った。それを恨みに思った〔　　　　〕は、その実につく〔　　　〕となり、収穫できないようにした。それで、〔　　　〕は〔　　　〕の木を切って捨てた。

問二　波線部㋐・㋑の意味を答えよ（終止形でよい）。〈４点×２〉

㋐〔　　　　　　　　　　〕　㋑〔　　　　　　　　　　〕

問三　二重線部ⓐ～ⓔのうち、接続助詞でないものを一つ選べ。〈３点〉

〔　　　〕

問四　二重線部Ａ～Ｃの現代語訳として、最も適当なものをそれぞれ選べ。〈３点×３〉

Ａ　ア　起こしてしまい　イ　きっと起こして

　　　ウ　起こし続けて　　エ　起こすならば

〔　　　〕

Ｂ　ア　言うものの　　　　イ　言うので

　　　ウ　言うこともあり　　エ　言ったとしても

〔　　　〕

Ｃ　ア　叶えないようにして　　イ　叶えられないで

　　　ウ　叶えないこともなく　　エ　叶えないで

〔　　　〕

問五　傍線部①を現代語訳せよ。〈５点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問六　傍線部②とあるが、尼は、どのようなことについてこのように言うのか。三十字以内で答えよ。〈10点〉

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問七　傍線部③とあるが、僧がこのような行為に至ったその思いを述べたものとして最も適当なものを選べ。〈７点〉

ア　橘の実に毎年のように虫がついて落ちるのは、尼の恨みのせいだ。

イ　一年中橘の木につく虫の姿が気味悪いので、それを見たくない。

ウ　毎年虫がついて、実が小さいまま落ちるので、この橘はいらない。

エ　虫がわく橘の木がずっと気になるので、仏道修行のじゃまだ。

〔　　　〕

問八　傍線部④とあるが、「自他の罪業」に当てはまるものを二つ選べ。〈４点×２〉

ア　僧が橘の木を大切に守ってきたこと。

イ　僧が老尼に橘の実を与えなかったこと。

ウ　僧が橘の木を切り捨ててしまったこと。

エ　老尼が僧に橘の実を所望したこと。

オ　老尼が虫になって僧にしたこと。

カ　老尼が強欲な僧を呪い殺したこと。

〔　　　　　　〕

【解答】

問一　老尼／橘／僧／老尼／虫／僧／橘

問二　㋐＝心が穏やかではない　㋑＝驚きあきれるばかりだ〈４点×２〉

問三　ⓑ〈３点〉

問四　Ａ＝ウ　Ｂ＝ア　Ｃ＝エ〈３点×３〉

問五　たとえ多く食べるとしても、〈５点〉

問六　僧が橘の実を惜しみ、少しも自分に与えてくれなかったこと。（28字）〈10点〉

問七　ウ〈７点〉

問八　イ・オ〈４点×２〉

【現代語訳】

老尼はこれを聞いて、穏やかではなく思い、「病に責められ、今日明日に死んでしまう身であるので、たとえ多く食べるとしても、二、三個をすぎることもないだろう。それほどのことを惜しんで願いをかなえないことこそ、情けない」と恨んだ。いつもは極楽に往生するようなことを願っ（てい）たが、今に至ってたちまちに悪事をたくらむ心を起こし続けて、あの木を食い枯らす虫となって、損をさせ、憤りを晴らそうと思ってそしった。隣の僧はこのことを知らず、橘を大事にしたが、橘が落ちたのを不思議に思って、取って見ると、袋ごとに五、六分ほどの虫がいた。明くる年もまた虫がわいて、橘も小さいうちに落ちたので、どうしようか、いやどうしようもないと思って、切って捨てた。

あの尼の願力と言うものの、多くの虫になったことは不思議である。僧の身で、橘一つを惜しんでは、わずかな願いも叶えないで、自他の罪業としたことは、あきれることだ。

【補充問題】（＊行数は本書に対応）

問１　「今日明日にきはまりたる身」（１行目）とは、どのような「身」か。最も適当なものを選べ。

ア　すぐに出家しなければならない身

イ　常に強欲な気持ちを持ち続ける身

ウ　しばらくすると快方に向かう身

エ　もうすぐ死んでしまう身

問２　「悪念」（３行目）とあるが、具体的にはどういう気持ちか。最も適当なものを選べ。

ア　僧の大事にする橘を枯らしてしまおうという気持ち。

イ　極楽に往生することを諦めようという気持ち。

ウ　橘をくれない僧の悪口を言って嫌がらせをしようという気持ち。

エ　自分の願いを叶えなかった僧を呪い殺そうという気持ち。

問３　「このこと」（５行目）とあるが、その内容として最も適当なものを選べ。

ア　老尼が僧の言いつけを守らず、橘を枯らそうとしていること。

イ　老尼を助けなかったことで、僧が極楽往生できなくなったこと。

ウ　わずかな橘を惜しんだことで、老尼が僧を恨んでいること。

エ　橘の木が多くの虫に食われ、すでに枯れ始めていること。

【補充問題解答】

問１　エ

問２　ア

問３　ウ